

ペン俳句会 句会報(第三六七号)

令和七年三月六日(木)

兼題『蒲公英』、席題『心』

句会を先月、一月と同じ場所で開催。投句十名。

出席九名。(欠席は金魚姫さん)

中村 晃也

春風やいよ高まる旅心

蒲公英や絮飛び初めしより孤独

にこりともしないモデルや春帽子

タンポポの径ピカピカのランドセル

差し出せる掌に山盛の花菜漬

未黒野や沖に連なる風の道

宮原 風

轟るや心音探る聴診器

リハビリのお手玉遊び辛夷咲く

階段は四足歩行春寒し

たんぽぽの絮を追ひかけ小さき靴

試着して若草色の春セーター

如月や老舗和菓子屋賑へる

大津 そうかい

呼ばるるをただ待つばかり落椿

蒲公英や踏まれてもなほ陽を掲げ

スマホ手に若きらの黙春浅し

淡雪や童心の彼口を開け

遙かへと薨の銀波春の月

鑑識の作業地を舐め冴返る

安藤 晃二

欠伸して書斎の窓辺春温し

さんしゅゆの花芽を揺らし鴨来る

一心の句作や梅に目白の来

診察待つベルゲンの絵に春日差す

蒲公英や土手を黄に染め幼児駆け

墓地に咲くいのち輝く鼓草

新田 ゆふき

石段を仰ぐばかりの白梅や

タンポポや絵本めくれば野の香り

心なき身に典雅なり福寿草

静真昼蒲公英三つ岩置

枯蘆に鴨を埋めて春の雪

心当てに訪ひし川辺の梅の里

浜口 金魚姫

雛納め男雛女雛を向き合わせ

二羽の鳩のんのん歩きの蒲公英黄

どすどすと踏んづけ座る蒲公英黄

灯を消せば雛の心に雛の歌

たんぽぽのぽぽの響きでスキップを

公園の砂山飾る蒲公英黄

松田 一文字

朱鷺色の空にゆふ星(うつ)春近し

心急く合格通知のとどく朝

たんぽぽや今朝の光に黄金色

ぼんぼりの灯のあはあはと雛かな

朝靄にけぶれる原野鶴一羽

蹲踞の水面に紅き落椿

志村 良知

梅日和駅に急く人愛でる人

小砂眼入怒風の春の街に舞ひ

杉林花房茶色禍々し

富士が嶺に沈む日輪霞濃し

久々の雨窓濡らし雛祭り

心躍る日本蒲公英群見付け

長尾 進一郎

芽を出せる草の躊躇ふ雲(みぞれ)かな

席譲り心穏やか春の朝

浮かび来て春見つけしや池の鯉

蒲公英や花咲き満ちて我見上ぐ

卒業歌の練習佳境春浅し

芽を出せる裸の枝や春隣り

西川 知世

横抱きにミッキーマウス東風の街

ベランダにばさと鴉来春遅々と

春愉し車窓の日差し背の揺れ
春宵や父の遺せしレコード盤
たんぽぽ黄ベンチを猫と分ち合ひ
旧道に車列の長し納税期

今回は令和七年四月三日(木)。兼題は季語「花」
(中村晃也さん出題)、席題は西川知世さん出題
の「植」です。

季語を学ぶ 初学にかえて

西川 知世

四月の兼題「花」

歳時記では「花」だけだと、春の季語(晩春)となる。「花とは桜をいへど、ただおしなべて千草万木のうへにもわたり侍る」と『山の井』『花といふは桜の事ながら、すべて春の花を言ふ』『白冊子』とあり、花は桜でありながら、春の花一般であるという重層的な規定がある。日本大歳時記の山本健吉の季語「花」の解説冒頭に、『花とはふつつ桜の花を言う……花は桜でありながら、春の花一般であるという重層的な規定がある。つまり桜以外の千草万木でも、ただ花と言った場合は賞翫の心が大きい。したがってこの季題は、詩的イメージとしては桜でありながら桜という特殊な限定を越えて、豊かで華やかなのである。…三春に渡っている……』単純な花の一字だが、なかなか奥深い季語である。「桜」をさくらと詠わずに

「はな」と詠む、読み手はその作者の感慨を読み取ることが大切なことなのだが、なかなか難しいことである。以前、他の句会で「さくら」は三音だが、「はな」は二音だから使いましたと言う若い猛者がいた。桜は別に季語として立っている。その差は大切、花という季語の華やかさ、雅さを大切にしたい。

辻駕籠や雲に乗り行く花のやま	西鶴
しばらくは花の上なる月夜かな	芭蕉
一昨日はあの山越えつ花盛り	去来
草越しに江戸も見えけり花の山	一茶
咲き満ちてこぼるる花もなかりけり	高浜虚子
花の風山蜂高くわたるかな	飯田蛇笏
大津絵の女はをかし花盛	岡本癖三醉
花更けて北斗の杓の俯伏せる	山口誓子
チチポポと鼓打たうよ花月夜	松本たかし
人体冷えて東北白い花盛り	金子兜太
花けぶる十日の月に近く寝て	野澤節子
齢加ふやすけさに花しだれけり	宮津昭彦
天寒く花の遊べる真夜かな	飯田龍太
幼な子の指より眠る花の雨	林 民子
花の下投げ銭溜る手風琴	増地鈴子
ブーメラン弧を描きつつ花の中	横井澄子